論　文 ニダバ (*Nidaba*) 30(2001), 65-73

済州島における日本語の使用とその変遷(1)

金　恩　希

1. はじめに

韓国で使われている日本語系の語彙は大きく二つの層に分けられる．一つは日本の軍事力を背景にした戦前のものであり、もう一つは日本の経済力を背景にした近代のものである[1]．前者を他律的な日本語の使用とすれば、後者は自律的な日本語の使用と言える．換言すれば、韓国において日本語は植民地時代から半世紀が過ぎた今でも侵略者の言語としての一面と、先進国(経済大国)の言語としての一面の両面性を持っていることになる．

1910年の日韓併合から1945年の終戦まで韓国は日本の植民地であったが、この時期、韓国では日本の植民地政策の下で韓国語の使用が禁止され、日本語の使用が強制された．その結果として日常生活で使われる日本語系外来語の数も増えることになった．植民地時代は、日本語が朝鮮半島における国語であった．終戦後も、日本語を第一言語として習得した世代と、それを国語として学習した世代がいるので、国語が韓国語に戻っても国語が日本語であった時代の名残を長年引きずることになる．

日本語は、再び1965年の日韓国交正常化を契機に韓国語と接触することになる．その後韓国は1970年代末までは急激な経済成長をなし遂げる．その間、日本語の名残から脱皮して韓国語を完全に取り戻すことに、民族のアイデンティティを求めようとした．そのとき、先頭に立ったのが国語純化運動であり、日常生活で使われる日本語の語彙を韓国語に入れ換えることに努めた．しかし、このような努力を続けてきたにもかかわらず、戦後半世紀が過ぎても未だに日常生活の中で多くの日本製の外来語は使われている．それは他律的な日本語の使用の時代の名残だけではなく、自律的な日本語の使用によるものも多くなったからである．

韓国語を代表する２つの放送局では、国語の主体性を回復するため、「正しい韓国語を使いましょう」という類のキャンペーン番組を毎日の正規番組として組んでいる．その内容は、大衆に広く用いられる日本語系語彙を韓国語になおすことである．たとえば、「私たちが思わずよく使っている「땡땡이[t'eŋt'eŋi] 무늬(水玉柄)」は正しい韓国語では「물방울무늬」と言いますので、美しい国語を使うことにしましょう」といった内容で構成される[2]．このような現象は、日本語が韓国の言語生活の中で否定的なイメージでとらえられていることでもある．漢字系借用語と英語系借用語は韓国語と文体的に対立し韓国語の意味を俗語化することが多いが[3]、日本語系の借用語は韓国語と対立して韓国語の意味を俗語化させることはない．かえって日本語の方が俗語になる．

済州島における日本語系語彙の使用の状況も韓国本土と同様であるが、いくつか特殊な

事情がある．韓国本土とは異なる特殊な事情がある済州島と日本語の関係を一つのケーススタディとして取り上げ、言語借用と変化について調べてみる．

2. 済州島の言語環境

済州島の言語は、韓国の国語学分野においては歴史的に15世紀の韓国語が使われているとも言えるほど特殊な語彙体系を持っているとされている．この特殊な語彙体系というのはおもに歴史的な特徴を指すが、もちろん日本語系語彙も含まれる.今回は日本語系語彙の使用の事情のみを検討してみる．

まず、他律的な日本語使用の時代をみると、1938年の済州島の統計によると、総人口303、651名のうち、日本人1、355名、日本居住者45、950名で、さらに島民の3分の1は日本に行ったことがなるという事実がある．そして、植民地時代の国語教育は日本語である．この二つの点から考えて終戦後も済州島は韓国語を国語とした学んだ世代が成長するまでは一種のバイリンガル地域であったと言える．この事情は、現在に至るまでいろいろ形で各方面に引きずられている.また、1945年を基準にして、済州島民の総人口の3分の1以上が直接、もしくは間接的に日本を経験している．徴用とか強制基準にして連行による本土の事情とは違い、ほとんどは出稼ぎが目的である．1970年代には国レベルの国語醇化運動の傍らで、植民地時代の国語教育による日本語と日本帰りの人による日本語が長年済州島の言語生活を支配することになる．この時代に島の近代的な大部分の産業の基礎が築かれたので、それが今日に至るまで産業各分野に残されている．代表的なのは土木業、建築業、縫製業などである．

自律的な日本語の使用の時代においては、済州島の観光業とみかん農業での日本語系語彙の使用があげられる．済州島の場合、大部分の文化は中央(ソウル)から流入するが、日本文化のみは直接受け入れることが多い．とくに済州島の代表産業である観光業とみかん農業への言語文化が顕著である．日本文化が直接入るのは日本に近いという地理的な理由からではなく、人の交流と物の交流が直接に行われているからである．

まず、観光業をみると、済州島は韓国最大の観光地で多くの日本人観光客が訪れる．とは言っても、日本人観光客は島の人々とは直接接触することではない．したがって、日本人観光客と島の人々のあいだで日本語によるコミュニケーションも成り立たない．問題になるのは、その日本人観光客と接する観光業界の従業員たちの日本語の使用である．いわゆる観光業界のジャーゴン(jargon)である．

1998年の済州観光協会の統計によると、済州島を訪れた外国人観光客223,701人のうち、日本人は117,948人で半数を越える．したがって、観光業界において、日本語関連の仕事に携わっている人も大勢おり、一つの業界(集団)をなしている．たとえば、ホテル従業員、旅行ガイド、ゴルフ場従業員、免税店の販売員など日本語使用可能者の集団である．

済州市では、日本人観光客が利用するホテル周辺に日本語表記の看板が立ち並んでいる．これは、他の国で見られる日本人街のようなものではなく、日本人観光客を相手にする店が並んでいるのである．現在、日本語は済州島の観光業界においてはある種の位相語として考えられるので、職業方言(dialect)、職業的干渉(interference)、町の文化(street culture)の側面からのアプローチが求められている．

観光業界の日本語の使用が人の接触によるものとすると、みかん農業に関する日本語は物の導入によるものである．また、観光業界に使われている日本語が日本語学習による一

次的な習得とすると、みかん農業に関する日本語系の語彙は栽培技術と伴って得られる二次的な習得である.

本研究は自律的な日本語使用の一例として、済州島の観光業界の場合とみかん農業の場合を取り上げる予定であるが、今回はみかん農業における日本語系語彙の調査を一つのケースとして提示してみる.

3. 先行研究の概観

先行研究の整理は、日本での研究動向、韓国の国語学、そして済州島の方言研究といった三つの視点から概観する必要がある.

日本では、主に日本語の海外進出に焦点があてられている. 代表的なものとしては、日本国立国語研究所が実施した「日本語観国際センサス」がある. 1996年から1998年まで3回にかけて日本国内をはじめとして海外27か国で実施した国際センサスであるが、国際社会および国際化時代に日本語がどのような範囲もしくは位置で使われているのかを浮き刻りにしようとする意図が窺える. このように日本国内外で行われている海外での日本語の使用と日本語の学習に対する研究および調査は、国際化時代における日本語の位置を確かめようとする目的で実施されることが多い.

韓国での日本語係の外来語研究は、日本語学側からは建設業、縫製業、美容業、印刷業などで使われている日本語の語彙を紹介するにとどまっている. 韓国の国語学側からは、国語純化運動のレベルで日常生活に使われている日本語を韓国語になおそうとする啓蒙的な研究が多かった. これからの日本語系語彙の使用に関する研究は啓蒙のレベルを越えて、音韻の変化、接触言語との意味の衝突など、言語接触とそれに伴う既存言語社会の変化についての言語学的な考察が要求される. このように多様な言語社会が並存しているにもかかわらず今まで済州島の言語は国語学的な民俗学的な価値だけを浮彫りにすることにとどまってきた.

済州島は韓国本土から離れていることから、韓国本土とは異なる文化を持っており、言語学のみならず民俗学ほかいろんな分野で研究の宝庫になっている. 言語学的には15世紀の語形が未だに残っており、国語史の研究もしくは昔の語形と音韻の変化を再建する際に多いに役立つことから、国語史の視点からの研究が盛んに行われてきた. このような済州島の方言研究は歴史的な音韻変化の研究や語彙研究に傾いていた. しかし、済州島の方言が韓国本土の言語社会と比べてきわめて目だつ現象の一つは日本語系語彙の使用である.つまり、他律的な日本語の使用時代の日本語の語彙も本土よりは多く使われているし、自律的な日本語系語彙の使用においても特殊な言語集団をなしている. このような事情からしても済州島の言語生活の中での日本語系語彙の使用に対する言語学的な分析を通じて、済州島の言語社会の変化を記述し、社会言語学的に言語接触に対する新しいモデルの提示が要求される.

4. ケーススタディー: 済州島のみかん農業と日本語

済州島のみかん農業の歴史を簡単に概観してみる. 済州島の在来種のみかんは長い歴史を持っているが、現在の栽培品種である温州みかんの栽培は1911年済州島の桜の苗木と日本の温州みかんの苗木の交換から始まる. 1950年代からは日本から本格的に苗木を輸入

し、栽培面積を広げて行った．1960年には済州出身の在日韓国人による「故郷にみかんの苗木を１本送ろう」といった運動も広がり、優良品種がたくさんはいってきた．1970年代には農業組合単位で日本のみかん産地への農業研修などもがさかんに行われた．以来、みかんは済州島を代表するものになり、いわゆるみかん文化を形づくることになる．現在はみかんの栽培面積は2.6万haで36,212戸の農家がみかん農業に携わっている[4)]．

日本からの苗木と栽培技術の導入は、当然ことばの借用を伴う．借用の形態としては、文献による借用を間接借用とすると、ものとともに借用した場合は直接借用と言える．みかん農業に関する借用語は実物すなわち苗木とともにはいってきたので、直接借用に当たる．

済州島で使われるみかん農業関連の日本語系語彙の調査を、日本語系借用語のケーススタディとして取り上げてみる．ここで日本語名というのは学名ではなく登録名であり、済州語名というのは農家への普及名と方言形を含んでいる．なお早生、温州、晩生などの分類名は省略する．

4-1．漢字音による間接借用

日本漢字に原音とは関係なく韓国漢字音をあてる場合である．もちろん日本語漢字の音読み・訓読みの区別もなくなり、すべて韓国語式の音読みで読む翻訳借用(loan translation)である．この場合、日本語からの借用にもかかわらず外国語という心理的な負担がなく自然に受け入れられる．殆んどがこのタイプにはいる．<表4—1>に事例をあげておく．

漢字音による間接借用の中で音韻変化を経験したものとしては伊予柑と柚子がある.伊予柑の場合は韓国語読みは이예감[ijəgam]であるが、이애감[iegam]と、半母音[j]が脱落する．このような半母音の脱落現象は계[kjə]を게[ke]と発音するなど、韓国語一般に多くみられる現象である．

柚子の韓国語読みは유자[judʒa]であるが、この変種として유지[judʒi]がある．これは異化作用(dissimilation)とみられる．後舌母音から前舌母音へ、広母音から狭母音への変化である．

4-2．日本語原音の直接借用

日本語音を直接借用する場合は、元々の日本語に漢字がなく仮名のみの場合である．日本語音を韓国語で模写する(replica)方式であるので純粋な借用とも言える．これらは、語末子音がないことから、いかにも日本語音節ということがわかる．

文旦の場合は漢字音による間接借用の韓国語読みでは문단[mundan]、日本語のreplica方式の直接借用の読みでは분딴[punt′an]になる．済州方言形式が분깡[punk′aŋ]になったのは類推現象(analogy)によるものと考えられる．日本語と韓国語のコンタミネーションによる混種語(hybrid)のレベルのものではない．原音분딴[punt′an]が、미깡[mik′aŋ](みかん)、낑깡[k′iŋk′aŋ](きんかん)と同類のものと意識から、それの語末音깡[k′aŋ]に同化された形式である．文旦([buntan])の語頭子音[b]が[p]なったのは語頭有声音のない韓国語の音韻体系に合わせた変化である．事例を<表4—2>にあげる．

日本語音を直接借用する場合、みかんの品種名ではないが、みかんのサイズをさすものとして玉(たま)が使われる．다마[tama](玉)は丸いものを指す形式として韓国で全国的に広く用いられている語彙である[5)]．済州島ではみかんの大きさの単位として使われる．選果場でみかんの大きさを0番から10番に分ける.正式には最も小さいサイズを0番果、最も大きいサイズを10番果と言う．極端に小さい0番果と極端に大きい9番、10番果は商品として使

<表4—1>

日本語名	済州語名 [IPA表記]	
温州	온주 [ondʒu]	
興津	흥진 [hüŋdʒin]	
山川	산천 [santʃ^{h}ən]	
大分	대분[tebun]	
茶原	다원[tawən]	
三保	삼보[sambo]	
岩崎	암기[amgi]	
宮川	궁천[kuŋtʃ^{h}ən]	
山下紅	산하홍[sanhahoŋ]	
米沢	미택[mit^{h}ek]	
愛媛	애원[ewən]	
上野	상야[saŋja]	
八朔	팔삭[p^{h}alsak]	
日南1号	일남일호[ilnamilho]	
南柑4号	남감사호[namgamsaho]	
清見	청견	
伊予柑	이예감[iegam],이애감[iegam]	[j]の脱落
柚子	유지[judʒi] 유자[judʒa]	異化作用

<表4—2>

日本語名	済州語名	
せとか	세또까[seto'k'a]	
ひのあけぼの	히노아께보노 [hinoak'ebono]	
文旦	분깡[punk'aŋ]	類推現象

えない．この非商品みかんを指す言葉として、果の代りに玉が使われる．0番果に対しては영번다마[jəŋbəndama](零番玉)と9番、10番果に対しては왕다마[waŋdama](王玉)と言う．二つとも韓国語と日本語のコンタミネーションによるもので、영번다마[jəŋbəndama]は영번(零番)と 다마(玉)、 왕다마[waŋdama]は 왕(王)と 다마(玉)による 混種語である． 다마[tama](玉)は意味を拡大した借用語になる．

4-3．命名化借用

みかんの品種の輸入の際には、原名を重視するのが原則である．つまり、前述の漢字音による間接借用と日本語音を直接借用する場合が原則である．しかし、1980年代に韓国農林部の指示により、農家への普及にあたって日本語への抵抗感を減らし、地元情緒に合わせた命名をしようという趣旨で新たに命名したものがある．済州島語においては命名法と造語法の問題になるが、馴染みのある地元の山や名所の名前が与えられた．しかし、やがて植物原名重視の原則に戻る．事例を<表4—3>にあげる．

<表4—3>

日本語名	済州語名	
市文早生	한라조생(漢拏早生) [hanradʒoseŋ]	
橋本早生	삼매조생(三昧早生) [sammedʒoseŋ]	
宮内伊予柑	용연만감(龍淵晩柑) [joŋjenmangam]	
清家ネーブル	정방(正房)네이블 [tʃəŋbaŋneibül]	
でこぽん	한라봉(漢拏峰) [halraboŋ]	不知火のブランド名
すだち	영귤(瀛橘)[jəŋgjul]	すだちのブランド名

4-4．複数の名称が併存する場合

漢字音による間接借用と日本語原音の直接借用の変種(variant)が併存している場合は輸入されてからの歴史が長くて、栽培面積が広いものが多い．

미깡[mik'aŋ](みかん)、낑깡[k'iŋk'aŋ](きんかん)、나스미깡[nasümik'aŋ](夏みかん)はみかん農家のジャーゴンではなく、済州島の全地域に使われる方言形であるが、これらは他律的な日本語使用の時代からの語彙で、自律的な日本語の使用による品種名の借用とは事情が異なる．「夏みかん」は韓国語の音韻体系に合わせて、나스미깡[nasümik'aŋ]になる．破擦音「つ」が摩擦音「스(sü)」になる．「夏みかん」の変種として나스[nasü](夏)も使われる．意味が拡大された借用語の例としてあげられる．漢字音による間接借用と日本語原音の直接借用、もしくは韓国語の変種が併存する場合、日本語原音の直接借用の場合が低価的な意味(derogation)になる．事例を<表4—4>にあげる．

<表4−4>

日本語名	済州語名	
宮本	궁본[kuŋbon] 미야모또[mijamot'o]	漢字音による間接借用 日本語原音による直接借用
夏みかん	하귤[hagjul] 나스미깡[nasümik'aŋ] 나스미깡[nasü]	漢字音による間接借用 日本語原音による直接借用
金柑	금귤[kümgjul] 낑깡[joŋjenmangam]	漢字音による間接借用 日本語原音による直接借用
みかん	귤[kjul] 밀감[milgam] 감귤[kamgjul] 미깡[mik'aŋ]	韓国語の変種 漢字音による間接借用 日本語原音による直接借用
早生	조생[tʃoseŋ]] 와세[wase]	漢字音による間接借用 日本語原音による直接借用

5. まとめ

以上のように韓国で日本語系語彙の使用の歴史と自律的な日本語系語彙の使用の一つのケースとして済州島のみかん農業に関する日本語系語彙を調べてみた.

他律的な日本語の使用の時代の名残りとしては日本語音を韓国語で模写する(replica)方式の借用語が多いが、みかん農業に関する日本語系語彙は漢字音による間接借用が大半を占める. 剪定、摘果、整枝、早生、晩生などのような栽培技術に関することばも同様である. 日本語に漢字がない場合のみに日本語原音を直接借用する.

これらのみかん農業に使われる日本語系語彙は広く大衆に用いられる外来語レベルのものではなく、済州島のみかん農業のジャーゴン(jargon)に過ぎない. ジャーゴンのレベルを越えて済州島の言語社会の語彙体系にはいるものとしては미깡[mik'aŋ](みかん)と낑깡[k'iŋk'aŋ](金柑)などがある. これらは済州島の方言体系では低価的な意味で使われる.

借用語の特徴としては物とともにはいってきた直接借用であるので、意味の拡大や縮小、転換やずれのような現象はあまり見られない. そして、統語現象に影響したり、造語法を拡大させた例も少ない. また、漢字音による間接借用が多いので、音韻の変化を起こしたものも少ない.

言語の借用というのは、与えた側と受け入れた側の文化の性格を反映するものである. したがって、借用語も接触した特定の意味領域に集中することが多い. 今日の済州島で見られる日本語からの借用語の中で、以上のようなにみかん農業に関することばが多いのは、済州島において13・14世紀に蒙古との接触の際に取入れられた牧畜文化と馬に関する借用語が多く残っていることと同様の現象である.

* 本研究は、財団法人住友財団「アジア諸国における日本関連研究助成」を受けて行った研究成果の一部である.
** 本研究に協力してくださった済州柑橘試験場の方々と西帰浦市、南済州郡のみかん農家のみなさんに記して感謝を申し上げたい.

<注>

(1) 川村(1994)
(2)「땡땡이 무늬」は、日本語「땡땡이(点々)」と韓国語「무늬(柄)」の混種語である.
(3) たとえば、漢字系の借用語「치아(歯牙)」は固有語の「이이・빨(歯)」より品のあることばとして使われる.
(4) 済州柑橘農業合同組合の統計による.
(5) 왕(王)は、接頭辞として「もっともそれらしい、一番である、大きい」の意味を持っている. また、玉(たま)は「전기다마/電気+玉(電球)」、「다마사탕/玉+飴(飴玉)」などの混種語を作り出した.

<参考文献>

李妍淑・田中克彦(1984)「借用の条件(上・下):朝鮮語に入った日本語」言語生活389、390、筑摩書房
加藤秀俊・熊倉功夫編(1999)『外国語になった日本語事典』岩波書店
川村 湊(1994)『海を渡った日本語 植民地の「国語」時間』青土社
熊谷明泰(1990)「韓国社会で用いられる日本語系借用語:その意味・用法の辞典的記述試案」
韓国外大論文集23、韓国外国語大学校
佐藤郁哉(1992)『フィールドワーク-文化の現場学の入門-』新曜社
佐藤暢治(1999)「韓国済州島社会における日本語の位置-現在そして未来-」『ニダバ』28、西日本言語学会
山口勝市(1977)『話題の柑橘100品種』,愛媛県青果農業組合連会
Bickerton, D.(1975), ***Dynamics of a Creole System***, Cambridge UP.
Chambers, J.K., Trudgill, P.(1980), ***Dialectology*** , Cambridge UP.
Hudson, R.A.(1980), ***Sociolinguistics,*** Cambridge UP.
Ralph Fasold(1990). ***Sociolinguistics of Language***, Cambridge, USA.
Trudgill, P.(1974), ***Sociolinguistics,*** Penguin Books, England.
국립국어연구원편 (1991) 『외래어 사용 실태 조사』국립국어연구원
김규선(1977)「한국 외래어 형성에 끼친 일어, 일본어 외래어의 영향 연구」, 어문학24, 한국어문학회
문화체육부(1997)『국어순화용어자료집』
김완진(1957)「제주도 방언의 일본어사 차용에 대하여」국어국문학18, 국어국문학회
송민(1979)「언어의 접촉과 간섭유형에 대하여: 현대한국어와 일본어의 경우」논문집10, 성심여대
송민(1989) 「한국어내의 일본적 외래어 문제」일본학보 23, 한국일본학회
양순필(1975)「제주도 지역의 일본어계 외래어 사용에 관한 조사연구」제주대 관광개발연구소 논문집 ,제주대 관광개발연구소
제주도편찬(1995)「제주어사전」제주도청
요코야마 케이코(1982)「한국어에 이입된 일본어-외래어로서의 일본어」국어학논총:조규예교수화갑기념논총, 형설출판사
요코야마 케이코(1982)「한국의 외래일본어에 대한 고찰」인문연구2, 영남대 인문과학연구소
농촌진흥청(1999)『단감/감귤』농촌진흥청 한국농업전문학교 전농업교육교재
서귀포시농촌지도소(1996)『감귤품질향상 기술교재』

제주감귤농업협동조합(1999)『감귤생산관리교육교재』
제주감귤농업협동조합(2000)『제주감귤과 주요품종』
제주도농촌진흥원(1992)『감귤주요병해충원색도감』